日本医史学雑誌第四十一巻第一号
平成七年三月二十日発行　平成六年十月十四日受付

済生学舎廃校後の各種講習会及び私立東京医学校・私立日本医学校

唐沢信安

はじめに

済生学舎は長谷川泰[1]により創立された私立医学校である。

明治九年四月より明治三十六年八月末日迄に医学を志す学生二万五千余人に教育を行い、廃校時には九千余人の医師を世に送った。その中には野口英世・吉岡弥生・小口忠太、浅川範彦・須藤憲三等、多くの医学者が含まれていた。

ところが、明治三十年頃[2][3]より長谷川泰が経営する済生学舎の教育目標である「西洋医の速成」の趣旨が時代的に歪(ひず)みを生じて来た。

東京大学医科大学の出身者（赤門派閥の人）の意見では、ドイツ留学の経験から、粗悪な私立医学校を全廃して、医術開業試験を廃し、官立の医学校の充実を計るべきであるとの趣旨が強く要請された（医育の統一論）。

やがてこの事は政治論争となり、「医師会法案事件[4]」「薬律改正問題[5]」、更に「専門学校令[6]」の発布となった。それらは済生学舎の存続を許さない厳しい勅令として、長谷川泰を苦悩せしめた。石黒忠悳[7]の勧(すす)めもあり、長谷川泰は済生学舎の廃校宣言を明治三十六年八月三十日に東京日日新聞等紙上[8]に広告した。

後に残された七百余名の学生と二十五名の旧済生学舎講師は青天の霹靂と驚き奔走した。以後の学生や旧講師が如何にして講義を続けたかを、資料に基づいて調査したので報告する。

一・同窓医学講習会の結成

明治三十六年八月三十日、長谷川泰[9][10]は済生学舎廃校宣言を新聞紙上に掲載したその日、墓参と称して郷里長岡在の福井村に帰っていた。祖先の墓のある新潟県南蒲原郡見附町の禅寺・勝流山智徳寺に滞在していた。

東京では夏期休暇が終り、上京して来た済生学舎の在校生七百余名が、校門の「廃校宣言」の掲示に仰天し、周章狼狽するばかりであった。

学生達は長谷川泰の政治力を信頼していただけに、その衝撃は大きかった。そこには在学生七百余名の今後の身上に配慮を欠いた長谷川泰の教育者としての欠陥が見られた。たとえば新潟県在住の済生学舎出身の医師及び県医師会の幹部に招かれ明治三十六年九月三日、「官立新潟医学専門学校設立について」と題して、新潟市役所講堂で熱弁を振るっていることである。

残された東京での済生学舎の在校生等、幹部学生・園田重徳[11]、鈴木寿一、篠田穣、鳥羽廉平の四名は協議の上、善後策として旧講師を歴訪し、講習会を開くように懇請した。

明治三十六年九月一日、廃校宣言の二日後に、四名の連名で一篇の檄文を書き、学生達に呼びかけた。

「謹みて旧済生学舎生徒諸君に次ぐ。

明治九年、済生学舎の創立せられてより二十有八年、其の間数千人の医師を養成し、社会の要求に応じ貢献して来た。政府は今回医学教育の完全を求めて専門学校令を発布した。（一部略）

我々は時運の潮流に棹さして奮励努力したが、結果的に大打撃を受けて、済生学舎は廃校となった。嗚呼何たる痛恨

ぞ。七百余の学生は何処にか適帰せん。（一部略）東京慈恵医院医学校、愛知医学校、大阪及び京都医学校、熊本私立医学校有りと雖も、悲しむべし、其の規模小にして到底吾人を受け入れる立場にない。

この迷える七百余の生徒を救済するに際し、我々の窮状を訴え、旧講師の門を叩き、石川・曲淵・竹崎・飯盛等の講師の救済実行に対する内諾を得た。

宜しく勉励せんと欲する学生は、来る九月四日午後一時に、本郷春木町の中央会堂に参集せよ。

御同感の士は、主唱者迄、名前・宿所・前記又は後期学生を記載して御通知あらんことを切に希望する。

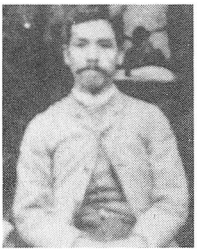
明治三十六年九月一日

園田重徳、鈴木寿一

篠田　穣、鳥羽廉平

旧済生学舎生徒各位　」

この園田等旧済生学舎の学生に最も同情を寄せたのは、済生学舎外科学・生理学講師・石川清忠及び飯盛挺造・竹崎季薫・曲淵景章の四名であった。長谷川泰の側近の一人である石川清忠[11]の済生学舎廃校直後の談話では、「今度の廃校に関しては、長谷川校長より何等の協議を受けていない。我々講師等は全く寝耳に水の出来事である。長谷川校長の今回の挙動は何とも評し様がない。ただ、呆れている。

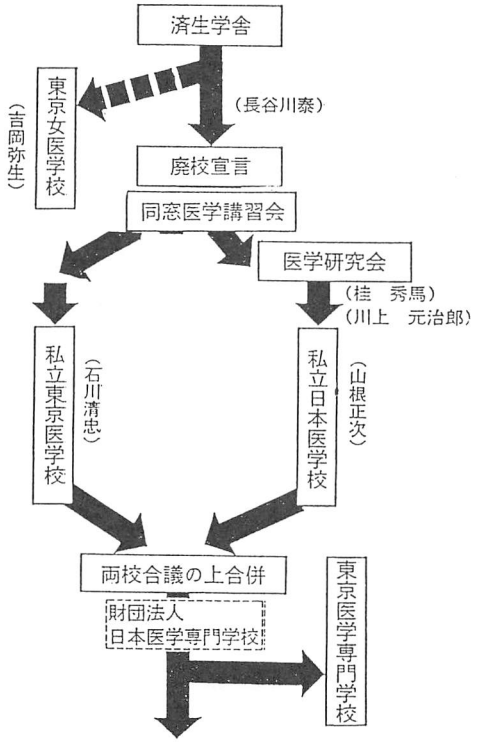


私立東京医学校校長
石川清忠

但し七百有余名の学生の身の上について同情すべきものがある。この学生の救済策として、学生の希望に基づき、旧済生学舎の講師と協議して『同窓医学講習会』を設立し、中途方向に迷える学生を救いたい」と述べている。その時、桂秀馬・馬島永徳・曲淵・飯盛・竹崎の諸講師の賛同を得ている。

同じく済生学舎の生え抜きの講師山田良叔は結核で療養中の身で同窓医学講習会には参

加せず、個人で無報酬で講義をしたいと語っている。



明治三十六年九月四日（廃校宣言より五日後）本郷区春木町中央会堂に旧済生学舎の学生全員と講師達は会合し、善後策を協議し左の方針[12][13]を決定した。

一、校舎は神田三崎町一丁目十一番地なる元大成館の跡を借り受け、毎日午後一時より講習を為すこと。而して之を「済生学舎同窓医学講習会」と称する事。

二、来る八日午後一時半より入学申込を受理し、九日又は十日より講習を開始する事。

但し、本年七月以前済生学舎に入学し、在学証を所持せるものに限る。

三、教科課目は開業試験に応じ得るの範囲内に於て、左の如く設ける事。

但し臨床講義に要する施療患者は、講師中に病院を設けている高田耕安、馬嶋永徳両病院に附託する事。

（前期）物理学、化学、解剖学、生理学、諸学科の実地研究。

（後期）内科通論、外科通論、内科各論、外科各論、臨床講義。

右の決議に基づき同窓医学講習会主唱者の園田・鳥羽の両名は翌日各講師を歴訪し、講義承諾を求めたところ、即時許諾をされた講師は左の如き人々であった。（当日すでに入会申込者は四百余名に達した）

〈前期〉

一、物理学　飯盛挺造

一、化学　曲淵景章

一、組織学　竹崎季薫

一、解剖学　同

一、生理学　石川清忠　須藤憲三

〈後期〉

一、病理総論　米山彦郎

一、外科総論　桂　秀馬

一、外科各論

（臨床講義）　塩田広重

一、内科各論　須藤憲三　馬嶋永徳
一、内科臨床講義　高田耕安
一、眼科学　水尾源太郎
一、産科学　中島襄吉
一、薬物学　石川清忠

二、本郷区住民の専門学校設立運動

済生学舎廃校で打撃を受けたのは七百余名の学生達であるが、本郷区内の書店[14][15]、下宿屋、質屋等から豆腐店、野菜店に致るまで学生相手の商店の人々は直接利益に打撃を受けた。各種営業の商店主が直接、間接に受けた金額は一ヵ年五十万円を下ることはないという。

同区の繁栄を願って商店主等有志は、同窓医学講習会の関係者の宅を訪れ、本郷区内に医学校再建を訴えた。

他方九月六日本郷座に参集した区の名誉職者・実業会・公民会・旅館組合・医療機械組合等の団体の有志者百余名が協議して、「専門学校令に適する医学校の設立を期すること。更に同窓医学講習所の便(べん)を計り、本郷区内に講習所を設置する事。有志団体は熱心に寄付金[16]を集め右の専門学校設立を援助する事」等を申し合せた。

更にこの運動と関連して、医学専門学校設立案には、佐藤進[17][18](順天堂医院長)、北里柴三郎(伝染病研究所長)、浅川範彦(済生学舎卒業生・医学博士・伝染病研究所部長)の三氏の援助の申出があった。

それ等に加えて、済生学舎卒業生の会「済生医会」の人々百七十五名の賛同者があった事を附記する。

三．神田三崎町時代の同窓医学講習会

明治三十六年九月十一日、同窓医学講習会[19][20]は、神田三崎町一丁目の大成学館の跡地の建物を借りて開校した。

校舎は二階建で、六十三坪の敷地に八十五坪の建物という、極めて狭隘（きょうあい）な校舎であった。一階と二階を各々二教室に分け、四教場とし、一階に事務室と教員室を設けた。

旧済生学舎の学生約三百名を教授する目的で借りた校舎であったが、五百余名の学生が参集した。

講師は前記の如く、石川・飯盛・竹崎・曲淵の四名の他、何れも義侠心を以て学生の救済を快諾された旧済生学舎の教師達であった。しかし前述の如く学生全員を収容するには余りにも校舎が狭隘であった。これを拡張するための土地もなく、門前に車馬の往来が激しく、騒音に悩まされた。

右のような次第で、この三崎町の土地は医学を講ずるには余りにも不適当な教室であった。従って早急に移転すべく、石川清忠等四名の講師は本郷区の有志と相談を開始した。

四．本郷区千駄木町に移転

本郷区の有志は、同窓医学講習会を私立医学専門学校に発展させるべく、移転先を色々物色した。その結果、千駄木町五十九番地の旧東京女学校[16]の校舎を捜（さが）し当てた。

この建物は当年五月新築落成したが、故（ゆえ）あって開校に至らず、売却の話が出ていた。校舎の敷地二千二百坪（現在の日本医科大学校舎地）で建物は二階建・三百五十坪を有し、周囲の環境は閑静で、近くに根津神社があった。

石川清忠・曲淵・竹崎・飯盛の四名の指導者は調査の上、直ちに譲渡の交渉に入った。しかし複雑な所有権の問題が存在し、石川等四名は困惑した。再び本郷区の有志の力を借りて直接談判の末、全ての所有権の問題は解決された。

移転時は土地・建物全て借物であった。かくて、明治三十六年十二月二十日、同窓医学講習会は千駄木に移転し、開校式典を行った（神田三崎町時代は三ヶ月で終った）。

当時の石川清忠の記録では、「十二月二十日、移転の式を挙げることを得たるは、特に本郷区有志者に感謝する所なり」と結んでいる。

五．私立東京医学専門学校設立計画

石川・竹崎・飯盛・曲淵の四名の人々は、同窓医学講習会を、専門学校令[21]に適合した医学校に昇格する運動を移転後開始した。賛同者は前述の北里柴三郎・浅川範彦、更に順天堂医院長・佐藤進の三博士及び済生学舎卒業生達百七十五名と、十二名の講師達であった。

左の如き趣旨の設立趣意書を公表した。

〔東京医学専門学校設立趣意書〕[8]

某等自ら揣らず爰に、専門学校に準據せる私立医学校を東京に設立し、本科及び別科を設け、其の別科には先ず済生学舎廃止の不幸に遭遇せる学生を収容して学術の速成を期す。（以下一部分省略）

謀等の微衷を翼賛し、左に掲ぐる概要に照らし、続々義捐あらんことを切望の至りに堪えず候。

かくて寄附金は一人金五円以上を明治三十六年十二月二十三日までに、本郷区春木町三丁目二十六番地の東京医学専門学校創立事務所内石川清忠宛に送ってほしいと広告した。

しかし、募金の方は、本郷区有志より三万円の計画が七千余円に止まる如く、計画通りに行かなかった。

六．文部省の専門学校令の一時的除外処置

明治三十七年二月六日、突如日露戦争が勃発し、軍医の急な不足を生じ、政府は困惑した。そこで、明治三十七年二月、文部省は「専門学校令[19][22]に対する除外処置」を発表し、不認可の私立学校の医学教育を認める事となった。

私立東京医学校では、石川等四名はこの文部省の態度の変化に対して、文部省に出頭して前記の私立東京医学校設立認可[19]を迫った。

然るに当局者は、「専門学校令第十五条を急いで実行する意志は今のところ全くない。従って専門学校令に依らない私立医学校も、廃止しなくて結構である。当分そのような意向であるから、今急いで医学専門学校に昇格させなくてもよい。そのまま教育を続けてほしい」との通達であった。

文部省の意向の裏には、済生学舎の廃校により、急激な医師の養成の減少を来した上に、日露戦争により軍医不足を招いた事実があった。

七．女子医学研修所の合併

この頃、石川清忠は、明治三十四年以来経営してきた神田三崎町の「女子医学研修所[16][19][23]」（東京歯科医学院内）を千駄木の校舎に合併吸収している。

この女子医学研修所は、明治三十三年秋、済生学舎舎長の長谷川泰が、女子医学生の新入生の入学を拒絶し、翌三十四年春には専門学校昇格目的と、風紀上の問題から女子学生の在学者に退学を命じている。

この時、石川清忠・飯盛挺造・竹崎季薫・曲淵章景の四氏の力で、神田三崎町の東京歯科医学院の校舎を借りて、「女子医学研修所」を開設した。女子医学研修所は、先に開校した吉岡弥生の東京女医学校（明治三十三年十二月五日創立）の

よきライバル校としての存在であった。この短い三年間であったが、女子医学研修所で学び医師となった女性は左の如くである。

飯田ゑい・早坂千賀・吉見こう・高須いま・菊地栄・三谷茂・白石すて・田中孝・高橋小丈（こじょう）・岡田つる・隅田マツ・的場荘・桑原リウホウ・桑田梅枝・新武たみ・豊田ゑち・仁保澄江・田口あき・水江しず。

続いて伊藤照・田中房・風間種・髙木かつ等三十三名の女医達であった。

八．丸茂文良（まるもぶんりょう）の「医学温習会」と慈恵医専への編入

済生学舎の名物講師「丸茂文良」[24][25]は、明治三十六年八月二十九日付けの長谷川泰の廃校の親書を受けとっている。長谷川泰の廃校宣言の手紙を見て、丸茂文良はせめて、後期生だけでも救済せねばと決心した。そこで、自己の講習会を「医学温習会」と名づけ、上野桜木町の丸茂病院を教室とし、外科学・皮膚科学を講じた。そこで左記の如き趣旨の募集をした。

「旧済生学舎・後期生諸君に告ぐ。

後期諸君の哀情を推察し、左の件挙行致候。

○外科・皮膚病科臨床講義

○場所・丸茂病院内（上野桜木町所在）

○時間・午後三時より一週三回（来週開始）

○費用・無束修・月謝一円

○継続・来る明治三十七年三月三十日迄。有志諸君は明八日午後一時参院ありたし。」

文良の旧済生学舎の学生に対する温情ある臨床講義は三年間継続されたが、文良の食道癌による急逝のため、明治三

十九年二月で消滅した。文良が世を去る一ヶ月前の二月十九日まで、日記帳によると「温習会」と書き残している。文良は四十五歳で没した。

長谷川泰の突然の廃校宣言で、当局の文部省も大いに動揺した。文部省は高木兼寛校長[26][27]に依頼し、旧済生学舎学生百二十名を私立東京慈恵医学専門学校の別科生として、二年・三年・四年の各学年に試験の上、編入せしめるよう依頼した。

『東京慈恵会医科大学八十五年史』[26]には次の記録が残されている。

「別科生志望者は明治三十七年七月、前期試験及第証書を所有する者に限り、試験の上、三学年、若しくは四学年に入学を許す。

認可私立東京慈恵医院医学専門学校

明治三十七年五月　　」

右の如く、旧済生学舎の一部の学生は、他の医学校に転入した者も当然あったと考えられる。

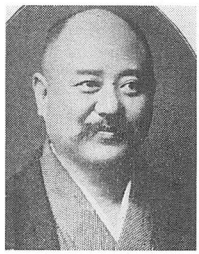
九．同窓医学講習会の脱会者と「医学研究会」

ここで、桂秀馬主催・川上元治郎後援の「医学研究会」の設立、更に山根正次の「日本医学校」の開校について述べたい。

同窓医学講習会では、明治三十六年十一月、園田重徳等百余名の後期生が、医術開業試験を直前に控えて、石川清忠等の講義に満足せず、反旗を翻し、神田美土代（みとしろ）町二丁目一番地の東京医師倶楽部内の「医学講習会」に走った。川上元治郎の筆になる『日本医事週報』[28]四四七号では次の如く記している。

「昨年十一月頃、石川清忠の設立せる同窓医学講習会では、平かならずして、脱会者が約百余名でた。そして自ら一つの講習会を設立せんと日夜奔走している」と述べている。

また、『医海時報』[29]五百一号でも、「石川氏に反旗を翻せる旧舎生・園田某等は別に主領を得て、石川氏に当らんと昨今頻りに奔走せり」と記述している。ここで東京医師倶楽部内の医学講習会について触れてみたい。



日本医事週報主管
川上元治郎

医学講習会[30]は、明治三十五年一月開校されたもので、東京市内の医家の書生に希望をもたせ、医術開業試験を受験させ、更に医学と共に徳義を教授する目的で作られたものである。

夜学の形式をとり、同窓医学講習会の脱会者が参加する二年前より開講されていた。会長は金杉英五郎が就任し、この時川上元治郎は「調査委員」の役職についていた。場所は最初神田小川町の東京顕微鏡院に於て始まり、大成学館分校・神田三崎町の東京医師倶楽部内へと、移転している。

その東京医師倶楽部内の医学講習会が、何故済生学舎の学生の入会を許可したかの経緯を述べる事にする。今日残されている、長谷川泰の親友の石黒忠悳[31]の日記には左の如く記してある。

「(明治三十六年) 九月五日。

川上元治郎・(桂) 秀馬の二人を招きて夕食を共にする。」

石黒忠悳宅に参上した同郷の川上元治郎(元長谷川泰の書生・眼科医)と桂秀馬(旧済生学舎外科学講師・侍医)の二人は、九月五日の夜、医学講習会に迷える旧済生学舎の学生の収容を依頼されたものと推察す。

九月十二日の『日本医事週報』[32]四四七号には次の如く川上元治郎が記している。

「済生学舎の生徒は、一同方向に迷い種々苦心の末、此程東京医師倶楽部の講習会へ入会を申込むもの続々あり」と。更に今回は済生学舎の学生の困難を察し、会員の紹介があればこの際入会を許すと述べている。

次に医師倶楽部の会員の紹介で入会した、元済生学舎の後期生の様子を記述してみたい。医学講習会内に、済生学舎後期生であった人々の為に、別に「医学研究会」が設けられた。医学研究会を運営する委員[33]は六名であった。委員は医師倶楽部の総会で選出されたものである。また講師一同は合議の上、一名の主幹を推薦し、一切の学業事務を管理した。別に会計監督を置き、金銭の管理をした。

右の主幹に桂秀馬が就任し、川上元治郎は後援会長役に就任した。講師は主幹の桂秀馬及び丸茂文良・栗本東明・橋田茂重・鈴木主計・大塚陸太郎・中原徳太郎・楠本長三郎の八名であった。

その他、塩田広重・中島襄吉・水尾源太郎・丸尾晋・東自助等五名が援助した。また遠山春吉・金杉英五郎の両博士も時間の余裕あり次第出席して講述した。

医学研究会の講義[34]も比較的整備されており、臨床講義も少くとも毎日一回行われた。多い日は内科・外科・眼科と三科目の実地演習が行われたという。

右のように、講義も充実し、入会申込者が次第に増加し、講堂に入り切れないので、二百二十二名で、以下は全て入会を謝絶した。

元来、医学研究会の目的は、明治三十七年三月まで存続する企画で発足したものである。従って後期生の半年間の教育が終れば、目的を達した事となる。

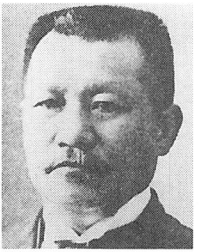
そこで明治三十七年三月二十四日に医学研究会では卒業試験を終了し、学生百五十二名に三月二十七日、修業証書[35]を授与した。当日は会長の桂秀馬は天皇の侍医で不在の為・栗本東明講師が代って授与した。また丸茂文良講師の訓辞があり、学生総代園田重徳が答辞を述べた。かくて卒業式は終った。

右の医学研究会の役目は終ったものの、前記の如く、日露戦争が勃発し、軍医不足より、一時専門学校令は凍結され、私立医学校の存続が許される事になった。

そこで、桂秀馬主幹・川上元治郎委員及び講師の人々は、文部省の方針に従って、当分私立医学校の永続し得るを見て組織を改革し、委員を廃して、理事若干名、幹事一名を置いて、文部省の医術開業試験が廃止せられるまで医学教育を続ける事を決心した。

その責任者に、川上元治郎の友人で、前警察医長・衆議院議員の「山根正次」を校長として迎えた。山根と川上の両人の交友関係は、共に明治医会の会員で、明治三十五年、同時に衆議院に当選した仲間であった。

十．山根正次と日本医学校の創立



私立日本医学校校長
山　根　正　次

川上元治郎に懇請された友人の山根正次は私立医学校の開校の準備を急いだ。桂・川上等の経営する医学研究会の残り七十名を引き継ぎ、新規募集の上、校名を「私立日本医学校」[36][37]と改称した。

各種学校として東京府知事に認可を得、明治三十七年四月十三日に開校式を行い、引き続き十五日より講義を開始した。場所は、神田美土代町二丁目の東京医師倶楽部内に本部を置き、後期生の講義を行い、前期生は神田三崎町の大成学館の跡地で授業を受けた。

校長に山根正次が就任し、教頭に栗本東明がなり、理事に丸茂文良・桂秀馬等が選任された。また前期の講師に旧済生学舎に関係のあった山田良叔・須藤憲三・池口慶三の三名が参加した。

開校時の講師は左記の如くであった。

○（内科学）栗本東明・大塚陸太郎・楠本長三郎・鈴木主計・丸茂文良

○（病理学）米山彦郎・東自助

○（眼科学）甲野棐・水尾源太郎

○（外科学）田代義徳・桂秀馬
○（薬物学）未定
○（産科学）丸尾晋

今日東京都公文書館に保管されている、山根正次の私立日本医学校の設立届書[38]を記述する。

「私立日本医学校設立認可申請書

私儀、今般私立医学校第二条に依り、私立日本医学校並に其分校設立仕候条、御認可相受度、別紙書類差添此段及申請候也。

東京市麹町区富士見町五丁目三番地

山根正次 印

明治三十七年四月五日

東京府知事・男爵・千家尊福殿　」

因みに学則の部に

「第六条・本校に左の職員を置く。

○校長一名（山根正次）

本校を代表し、校務を総理す。

○理事若干名（桂秀馬・川上元治郎・丸茂文良）校長の諮詢に応じ、校務を議定す。

○教頭一名（栗本東明）

教課上の事務を総理す。

○教師

校長の指揮に応じ、各学課の教習に従事す。
○幹事一名（磯部検三）　校長の指揮に従い一切の庶務を掌理す。」
ここで磯部検三（検蔵）の事に触れてみたい。

十一・磯部検三の履歴

前記「幹事」一名とあるのが日本医学校創立時の磯部検三の役職で、学校の事務長に相当する仕事をしていた。
磯部は山根正次の書生で、山根が警察医長時代にはその秘書であった事は、磯部検三の末弟、重枝習三様[60]（97歳）、及び山根正次の末娘、赤川信子様（調査当時九十一歳）の証言で解明された。
『医海時報[39]』七九〇号では「磯部某なるものは山根氏と同郷にして、氏が警視庁第三部長たりし当時より、その部下、殊に秘書官の地位に在りしもの。その後今日に至る迄、殆んど師弟・主従の関係にあり。（一部略）
而して現時は山根氏の日本医学校の幹事たり」と記述している。
また多くの日本医科大学史[41]は、「川上元治郎が、日本医事週報の投稿家・磯部検三にすすめて私立日本医学校を造り、先輩の山根正次と相談し、山根を校長にすえた」との大変な史実に反する記述がある事を付記しておく。
因みに『日本医科大学十五年記念誌[40]』の記録では、「川上元治郎は日本医事週報の寄書家・磯部検蔵氏を慫慂して学校の設立を要求し、磯部氏は先輩山根正次氏に諮り、遂に日本医学校として認可された」と大変な誤記をしている。
官尊民卑の厳しい明治期に、私立医学校・済生学舎を卒業して若干四年、実績のない磯部が、東京帝国大学医学部出身の教授、田代義徳・甲野棐等及び侍医の桂秀馬・恩師の丸茂文良等・当時日本の医学界の大家達を講師として雇用する事は不可能である。
森鷗外[42]等と共にドイツ留学を果した、法医学者・山根正次の政治的手腕により始めて学校の設立運営が可能であった

事は事実である。

磯部検蔵の実績及び履歴に多くの詐称が見い出される。特に、医師免許を得た年月日を三年も早く取得した事として生前に書き残している。

『日本医科大学十五年記念誌』[43]の人物篇に、「磯部維持員は明治三十年、医術開業試験に合格す」と記している。一方今日残された『磯部検蔵の日記』[44]の控覧には、自筆で左の如く記録している。

「医師免状控

明治三十三年十月八日、得業

同　　十二月六日、許可

十八へ二一号　證

内務大臣・末松溢澄

衛生局長・長谷川泰　　」

磯部はなぜ医師免許証の受領年月日を偽らねばならなかったか。それには磯部が創立者と称するための卒業後の実績を作るためと推察される。磯部検蔵はあくまでも山根の秘書であり、陰の補佐役に尽力した人物で、日本医学校の創立者ではない。

十二　石川清忠の東京医学校創立

他方、石川清忠の主催する「同窓医学講習会」も、私立東京医学専門学校の設立を申請したが、文部省に受け入れられず、当分各種学校令に従って、私立医学校として届出ている。

「私立東京医学校設立[45]に付認可申請

東京市本郷区駒込千駄木町五十九番地の建物を借り受け、私立東京医学校設置致度候条、御認可相成度、別紙関係書類相添え此段申請候也。

明治三十七年三月二十一日

東京市本郷区湯島新花町九十七番地

設立者・医師・石川清忠印

東京府知事男爵・千家尊福殿

追って認可被下の上は、来四月二十日より開校を仕候世。」

右の如く、校舎も土地も借りての出発であった。開校は明治三十七年四月二十日で、私立日本医学校と相前後しての事であった。

石川清忠の教育方針[46]は、勉めて実験的と為し、空論に走らず、一々これを実地に解釈消化せしむるを目的とした。従って医術開業試験[47]の成績も極めて良好であった。因みに明治四十二年の試験の志願者と、合格者の比率は五割に達していた。『東洋医事新報[47]』二十六号の記録によると、約三百名の学生が在籍していたとの事である。

十三・私立東京医学校と日本医学校の合併

済生学舎廃校後、約六年の間に、両校が存続する事すら危険なほど重大な社会問題が次々に起こった。

先ず第一は、明治三十八年七月一日、文部省は「私立医学専門学校指定規則[48]」を発布し、両校が生き残るためには、官立専門学校並の設備と附属病院の充実がなければ認可しないといった厳しい規則を作った。

第二番目は、明治三十九年五月二日、「医師法[49]」が国会で審議の上、可決された。この時、山根正次は衆議院で法案の提出者として活躍する。しかし医師法第十四条に、「医術開業試験は八年後に廃止する」ことが明記された。認可されて

いない両校の前途は厳しいものとなった。

第三番目は、追い撃ちをかけるように、文部省は「試験委員の講師兼任禁止」[50]の通牒を明治四十三年二月十七日に通達した。

これらの法令や規定が文部省から発せられる陰には、東京帝国大学医学部の赤門派閥の人々（明治医会）の強力な、私立医学校の僕滅運動があった事は見逃せない点である。

試験委員[51]で講師の中原徳太郎・遠山春吉・林春雄・橋本左武郎の四名は代表者として、文部省当局及び足立寛試験委員長に、「吾々は私利の為に医学を講述するに否ず。文部省が自ら為さざる所を、吾等が利益を外にして尽力しているのだ」と強く抗議した。また日本医学校の山根[52]正次も、文部大臣に直接会い、厳しく右の文部省の通牒の不条理を質問した。

他方、私立東京医学校・日本医学校は共に一時、校運も隆盛を極めたが、医師法の制定で試験の廃止も間近となり、経営は次第に衰退し始めていた。

そこで両校が文部省の認可の医学専門学校として生き残るために、明治四十二年秋より、両校の合併問題が持ち上っていた。

今回の文部省の講師兼任禁止の通牒があり、危機感を抱いた両校理事者は、急遽協議の上、明治四十三年三月十八日、合併を決議[53]した。

石川清忠には医師の後継者はなく、自校の私立東京医学校を日本医学校に譲る事を決心した。両校とも経営は苦しく買収する力はなかった。磯部検蔵[54]も「私立日本医学校移転式典」の演説で、「私立東京医学校を合併するところの機会に於きまして、それを譲り受けた」と明言している。

『日本医学』[55]67号では、「一定価格を以て、同校建物器械一切を買収した」と偽りの記録を残している。磯部の言動に

はこのような虚飾の記録が多く見られる。そのために後世、「磯部が創立者で、日本医学校[56]が東京医学校を買収した」との間違った校史が残されている。

『医海時報[53]』八二六号では、「両校理事者等協議の上、合併を決し、先ず東京医学校の廃校を断行し、既に東京府庁に其手続を完了すると同時に、事実上の合併を決行せり」と記述している。

かくて生徒は同等の資格で合併し、講義は全員、本郷千駄木の校舎で行う事になった。山根正次が、合併後も継続して校長に就任し、石川清忠に代り、滝沢竹太郎が理事となり、磯部検蔵は幹事として学校事務の責任者となった。万世橋の旧日本医学校の建物は改修して日本病院として使用された。

山根校長[57][58]は、同郷山口県出身の曽祢荒助（二代目韓国統監）の懇請を受け、日本医学校校長・衆議院議員の身分のまま、明治四十三年三月三十一日、韓国衛生顧問として京城に赴任して行った。以後たびたび韓国との間を往復している。

留守役[59]の磯部検蔵は懸命に校長代理の役職を果すが、次第に権力を持つようになった。

考　察

今日、日本医科大学の校史は、昭和十五年以降四冊の校史が出版されている。そのいずれにも[62][63][64][65]「日本医学校は、川上元治郎の勧めで、磯部検三が設立し、同郷の山根正治を校長に雇った」と明記してある。今日まで、筆者の調査して来た事実と異なる校史が現実に存在している。

官尊民卑の明治時代に、書生で私立の済生学舎出身の磯部検三が、主人の衆議院議員で法医学の大家山根正次を校長に雇用する事は、常識的にはあり得ない事である。

また、済生学舎出身の医師は、全国に七千人とも九千人とも伝えられる。中には浅川範彦・須藤憲三・小口忠太・光田健輔等のように、医学博士・ドクトルの称号を得た一流の医学者が沢山輩出された。

校史に書かれた如く、本当に川上元治郎が、学問的に実績の全くない、しかも医師免許を得て四年目の磯部検三[77]に頭を下げて医学校の設立を勧めたのか否か、疑問が残る。

そこで筆者は、新潟県栃尾市泉の川上元治郎の生家を訪れ、沢山の資料の提供に与った。更に今日、川上元治郎主管の『日本医事週報[66]』を綿密に調べた。そこには山根正次と川上元治郎の交友記録は沢山出て来るが、磯部の名前は全く出てこない。

更に、磯部検三の生家と養家を求めて、山口県厚狭郡山陽町殖生と籾の木部落を訪れた。そこで実弟の重枝習三様（当時九十三歳）にお会いした。重枝様から、「磯部は山根先生の書生をしながら医学を勉学した」との証言を得た。

次に山根正次の研究家・田中助一先生[67]のご案内を得て、山根の生家、山口県萩市御殿山を訪ねた。そこで山根家の遺品・写真集を拝見し、東京の山根正次の兄の孫・山根寿代様を紹介された、山根寿代様の御宅には、正次の沢山の遺品が残されていた。特に山根正次の自筆の長文の履歴書[68]「私歴」には重要な記録があった。

「履歴

原籍、山口県阿武郡椿郷東郷村第六百六十四番地、正五位勲三等

山根正次

安政四年十二月二十三日生」

と履歴書の巻頭に墨筆で書かれており、日本医学校設立の項には、朱筆で次の如く書かれていた。

「明治三十七年四月、日本医学校ヲ創設シ、其校長トナル。」

即ち山根は、自分で学校を興し、校長となったと明記している。

また、山根正次の末娘・赤川[60]信子様（調査当時九十一歳）から、「磯部は山根家の書生で、父正次の秘書でした。大変よくして頂きました」との証言を得た。山根信子の手元にある、磯部検三から信子様に宛てた絵ハガキ[70]を拝見した。明治

四十一年十一月十三日の消印が押してあり、表紙に日本医学校の運動会で、小柄な山根校長が提灯レースで走っている姿が見られた。裏面に達筆で磯部は次の如く書いている。

「麹町区富士見町五の三・山根信子様」

「おとう様は、この日も一等賞でございました。記念のお葉書を差し上げます。

皆んな喜んでいます。おとう様のご健康をおいのり致します。さようなら、

十一月八日、　日本医学校にて

磯部検蔵

外五百名（職員及学生）」

右の一枚の絵ハガキに当時の山根と磯部の主従関係を見る事が出来る。

以上の調査で、山根が川上元治郎の依頼を受けて、日本医学校を造った事は証明された。磯部は山根の忠実な部下であった事も明確になった。

次に、大学の図書館に帰り、加藤富三館長より意外な文献を紹介された。昭和十一年六月二十四日付、『日本医事週報』[71]（七一九号）に「日本医科学教授会誕生顚末記」と題して次の文章が記載されていた。

「偶々、この大学に磯部検三なる人物が登場したのは一昨年のことであった。『この大学の前身たる日本医専の創立者は実に我輩である』と磯部氏は名乗りを上げたのである。」

かくて、大学当局は大学の乗っ取り運動か。将に大学の危機と、古文書を出して連日協議が開かれたと報じている。

当時、日本医科大学は、塩田広重学長兼理事長の時代で、大学の興隆のために、研究室の充実、附属病院の建設と懸命に努力がなされていた時であった。塩田学長は有名な独裁主義者の学長として内外に知れ渡っていた。従って理事に南大曹・山田弘倫が就任し、絶対的に東大派閥の支配下の私立医科大学であった。

こうした校風に対し、同窓生の一部に不満を持った人々がいた。この時、磯部検三は、学校騒動で責任をとり、一時満州浪人を経験したが、その後日本に帰国していた。

山口県選挙管理委員会[72]の報告では、磯部は大正六年四月から昭和三年二月までに四回、衆議院選挙に出馬し、落選している。

それに懲りず、昭和九年六月二日、磯部は上京して、同窓会幹部三十余人[73]を集め、その席上で、「日本医学校の創立当時の情況を述べ、この大学の前身の日本医学校・日本医専の創立者は我輩である」と名乗りを上げて演説した。

磯部の師の山根正次は大正十四年に世を去り、また川上元治郎も大正四年に死去し、磯部の偽りの発言を阻止させる有力な関係者は既にいなかった。

同窓会の幹部、竹内笙五郎・新田清三郎・長沢米蔵・森崎半次・河野勝斉等五名は磯部の演説に強い感銘を受けた。更に犬養・渡辺・佐藤・内藤・虎岩・加藤・磯・藤枝・佐野・水野の十名、合計十五名の同窓会幹部は、磯部の主張を容れ、磯部と密談をたびたび行っている。磯部日記では、昭和九年五月一日より同月三十一日までに二十四回も密談が磯部宅で行われ、綿密な計画が進められた。

短気な塩田学長は烈火の如く憤った。磯部日記（七月二十四日）に、「塩田大恚[75]（大いに怒る）」と記している。塩田学長派と磯部派の闘争は四ヵ月に亘り行われた。結論として塩田学長が破れた。

その理由は、磯部が自分の筆で書き提出した。「財団法人日本医学専門学校設立申請書」（明治四十五年二月八日届）にあった。

文部省に提出した「財団法人設立願の書類に、学校の筆頭理事に磯部は自分の名前を記入し、山根正次の名前を五番目に記入した事にある。当時、山根校長は前記の如く、全て磯部に学校の経営を委ねて、韓国で北満よりペストが侵入し、防疫行政に必死で没入していた。因みに、磯部の筆による、「財団法人[74]・日本医学専門学校申請書」を転写する事に

する。

「財団法人設立願

今般完全なる医学校教育を遂行し、善良なる医師を養成し、凡く施薬救療を行ふの目的を以て、其財産を保有するが為に、財団法人設立仕度候条、御許可相成度別紙書類差添えへ此段申請仕候也。

明治四十五年　月

東京市日本橋区蛎殻（かきがら）町三丁目十一番地
申請人　磯部検蔵 ㊞

東京市浅草区北富坂町十七番地
申請人　増野　豊 ㊞

東京市本郷区根津須賀町七番地
滝沢竹太郎 ㊞

東京市浅草区新福井町二番地
申請人　内田慎太郎 ㊞

東京市牛込区新小川町二丁目八番地
申請人　山根正次 ㊞

東京区浅草区千束町三丁目五十二番地
申請人　松村清吾 ㊞

東京市本郷区駒込千駄木町五十七番地
関口六三郎 ㊞

文部大臣長谷場純孝殿　　」

右の古文書を調査した大学の法律顧問・法学博士　三潴信三は「この書類を見る限り、磯部検三が日本医専の創立者と名乗っても一向に僭称ではない」と結論づけた。

済生学舎廃校前の明治三十四年以来、日本医学校　日本医専と外科教師であった塩田学長にとっては、誠に腹立しい事であった。しかし親友の中原徳太郎や小此木信太郎学長が命を賭して再興した日本医科大学を見捨てる事は出来なかった。

磯部日記に「七月二十六日、塩田面詰（面と向ってせめる）極練（いさめる）塩田首福（罪を認める）」と激しい言葉が並んでいる。

勝利を得た磯部は自宅のある淀橋区西大久保で早速、『日本医科大学発達史』[76]の編纂に着手した。以後学内では、済生学舎を論じる事は禁句となり、磯部は日本医科大学の創立者と称せられた。また「維持員」と云う最高の称号を受けた。

磯部日記（八月十一日）の項に「大学校史檄印（自分の正しさを知らせる文章）成る」と記している。更に日本医科大学の新聞『自治会会報』[77]三三号に「今昔物語（二）」と称して、「川上元治郎が何度も、磯部の自宅の蛎殻町に来訪して、学生救済の為に医学校を設立するよう促がした」と偽りの文章を発表した。

右の文章を基にして、昭和十五年、『日本医科大学十五集年記念誌』[78]が編集された。

その後、磯部自身の筆で書かれた誤まれる校史は、あたかも真実かの如く継承され、部下で磯部に恩顧を受けた「長沢米蔵」[63][75][79][80][81]名誉教授の筆で、磯部の学祖説は着実に日本医科大学の学内に定着して行った。

長沢米蔵は長寿の人で、九十歳で昭和五十一年九月二十三日に世を去るまで、日本医科大学では、長谷川泰や済生学舎を論じる事は禁句となっていた。

長沢は長年大学で、病理学を講じ、また学内では理事及び同窓会最高幹部として功績のあった人である。しかし校史

に関しては、磯部検三から受けた個人的な恩義と、公(おおやけ)の校史の記述を混同した人物と云える。

御子息の長沢豊先生の手記では、「父は磯部先生の知遇を得て、先生のバックアップで、経済的心配もなく、東大の病理学教室で山極勝三郎先生の薫陶を明治四十一年から大正三年まで受けた」と述べておられる。

因みに、磯部検三の死を悼む、昭和二十四年の長沢米蔵の追悼文[80]（『日本医科大学雑誌』十六巻十二号）の一部を転載すると次のようである。

『わが磯部先生は、川上元治郎氏と手を携えて『医師クラブ』を組織し、更に進んで『日本医学校』の設立を計画し、明治三十七年神田昌平橋畔に弧々の声をあげたのが、即ち本学の濫觴である。当時校長は山根先生であり、先生は幹事として専ら学校の管理経営に当られた。』

以上、日本医科大学の校史に於て、種々不明であった済生学舎廃校後の歴史を詳述した。また従来の校史の誤れる記述を指摘した。

磯部検三(蔵)は決して日本医学校の創立者でない事を証明した。更に、日本医科大学の源流は、長谷川泰の済生学舎にある事を明確にした。

結　論

(一) 本論文で済生学舎廃校後の各種講習会、特に同窓医学講習会より、医学研究会の興り、更に私立東京医学校・日本医学校の創立の経緯を述べた。

(二) 医学研究会は、同窓医学講習会に反旗を翻した園田重徳約百余名が、東京医師倶楽部内の医学講習会に走り、興したものである。（桂秀馬主催・川上元治郎後援）

(三) 日本医学校の創立者は、衆議院議員で法医学者の山根正次が、友人の川上元治郎と学生に懇請されて設立されたもの

である。

磯部検三は山根正次の元書生で、秘書役の幹事であった事を証明した。また磯部検三には詐称が多い事を明らかにした。

(四) 私立東京医学校と日本医学校は協議の上で合併したもので、従来日本医科大学の校史に記述された、「日本医学校は私立東京医学校を買収した」との記載は誤りであることを明らかにした。

(五) 現代の正しい日本医科大学の校史は長谷川泰により、明治九年創立された「済生学舎」に源流を置くものである。従来の校史に記述された「磯部検三（蔵）が日本医学校を創立した」との史実は全くなく、誤記である。

日本医科大学の校史は、右の点につき、書き改められることを望んで結論とする。

（敬称は歴史上の人物のため省略す。）

謝　辞

今回の論文を書くに当り左記の方々に御指導をいただいた事を報告し、謝意を表す。

田中助一先生、蒲原宏先生・酒井シヅ先生

菊地吾郎先生　斎藤達雄先生・木下博先生・加藤富三先生・奥富敬之先生・三好正之先生・山根寿代様・赤川信子様・山本千代様・重枝習三様・入江元信様・大幸重子様・川上健児様・川上守三様・名和田豊先生・中根トミ様・久米正臣様・後藤安臣様・佐藤安子様、・塩田義重様その他多くの方々。

更に、東京都公文書館・日本医科大学図書館・東京大学図書館・東京慈恵会医科大学図書館・岡山大学医学部図書館・北海道大学医学部図書館の職員の方々に深謝す。

文献

(1) 長谷川泰「私学開業願」東京府知事楠本正隆宛、明治八年十二月二十四日（東京都公文書館蔵607—B4—9）
(2) 森鷗外「日本医育論」『医事新論』四号、明治二十三年三月
(3) 入沢内科同窓会「入沢先生の演説と文章」二八四—二九六頁、克誠堂書店、東京、昭和七年
(4) 「医師会法案」（第十三回・貴族院議事速記録）第一九号、二四〇～二五三頁、明治三十二年一月五日
(5) 谷岡忠二『日本薬剤師会史』九〇—九三頁、日本薬剤師会、東京、昭和四十八年
(6) 「専門学校令」『東京医事新誌』一三〇二号、四二～四三頁、明治三十六年四月十日
(7) 「石黒忠悳日記」明治三十六年八月二十五日～九月五日迄（不円文庫、大幸重子様蔵）
(8) 「済生学舎廃校の広告」『東京日日新聞』明治三十六年八月三十日
(9) 「長谷川泰の医学校国立論」『順天堂医事研究会雑誌』三六九号、九十～九十一頁、明治三十六年十月
(10) 「長谷川泰氏の来越と同氏の医学校問題に関する意見」『北越医会会報』一三七号、五五一～五五六頁、明治三十六年十一月
(11) 「済生学舎生徒の奔走」『医海時報』四八二号・六七五頁、明治三十六年九月五日
(12) 「済生学舎廃校彙報」『順天堂医事研究会雑誌』三六九号三八五～三八九頁、明治三十六年九月
(13) 「済生学舎の廃校」『医事新聞』六四五号、一三七〇—一三七二頁、明治三十六年九月十日
(14) 「本郷区住民の寄付金」『医海時報』四八八号、七六九頁、明治三十六年十月十七日
(15) 「本郷区住民の運動」『中外医事新報』五六四号、一二九〇頁、明治三十六年九月二十日
(16) 「医学同窓会の近況」『医海時報』五〇一号、七三頁、明治三十七年一月十六日
(17) 「東京医学専門学校」『医海時報』四八八号、七六八頁、明治三十六年十月十七日
(18) 「東京医学専門学校設立趣意書」『医海時報』四八九号、七九〇頁、明治三十六年十月二十四日
(19) 「私立東京医学校設立之由来」『東洋医事新報』第一号、六一～六四頁、明治四十年一月
(20) 「私立東京医学校設立の由来附現況（承前）」『東洋医事新報』二号、一四一～一四四頁、明治四十二年二月

(21) 「東京医学専門学校設立計画」『順天堂医事研究会雑誌』三七〇号、九一～九三頁、明治三十六年十二月
(22) 「専門学校令に対する除外」『医海時報』五〇六号、一五〇頁、明治三十七年二月二十日
(23) 多田澄「日本女医五十年史」『医事公論』一六一四号、医事公論社、昭和十八年七月
(24) 「丸茂文良の医学温習会記録」（丸茂文彦先生蔵）
(25) 唐沢信安「我が国医学会初のX線実験・臨床講義者丸茂文良」『日本医事新報』三六六〇号、六三～六五頁、平成六年六月十八日
(26) 『東京慈恵会医科大学八十五年史』一〇〇～一〇一頁、東京慈恵会医科大学、東京、昭和四十年
(27) 「文部省の勧誘と私立東京慈恵医院医学専門学校の別科」『医海時報』四八六号、七三七頁、明治三十六年十月三日
(28) 「日本医学校」『日本医事週報』四四七号二頁、明治三十七年四月十六日
(29) 「医学同窓会の近況」『医海時報』五〇一号七三頁、明治三十七年一月十六日
(30) 「医学講習会開講式」『日本医事週報』三六三号、三頁、明治三十五年一月二十五日
(31) 「石黒忠悳（ただのり）日記」明治三十六年九月五日（不円文庫・大幸（おおさか）重子様管理）
(32) 「済生学舎廃校余聞」『日本医事週報』四四七号、二頁、明治三十六年九月十二日
(33) 「医学研究会の新年会」『日本医事週報』四六四号、二頁、明治三十七年一月十六日
(34) 「春寒料峭（しゅんかんりょうしょう）録」『日本医事週報』四四六号、明治三十七年一月三十日
(35) 「医学研究会の修業証書授与式」『日本医事週報』四七五号、二頁、明治三十七年四月二日
(36) 「私立日本医学校開校式」『医海時報』五十四号、二九八頁、明治三十七年四月十三日
(37) 「日本医学校」『日本医事新報』四四七号、二頁、明治三十七年四月十六日
(38) 「私立日本医学校設立認可申請書」山根正次、東京府知事千家尊福宛、明治三十七年四月九日（東京都公文書館、六二六—C五—一〇）
(39) 『与衆議院議員山根正次君（五）』『医海時報』七九〇号、明治四十二年八月七日
(40) 『日本医科大学十五年記念誌』六頁・日本医科大学、東京、昭和十五年

(41) 『日本医科大学七十周年記念誌』八～九頁、日本医科大学、東京、昭和四十八年
(42) 田中助一『萩の生んだ近代日本の医政家・山根正次』十二頁、西島愛三出版、山口県、昭和四十二年
(43) 「磯部検蔵」『日本医科大学十五年記念誌』二二〇―二二一頁、日本医科大学、東京、昭和十五年
(44) 『磯部検蔵日記』（昭和九年）磯部医師免許控（日本医科大学図書館蔵）
(45) 「私立東京医学校設立認可申請書」石川清忠、東京府知事千家尊福宛、明治三十七年三月二十七日（東京都公文書館蔵、六二六―C5―十二）
(46) 「私立東京医学校設立の由来附現況（承前）」『東洋医事新報』二号、一四一―一四四頁、私立東京医学校編集部、明治四十年二月
(47) 「東京医学校出身者の及第」『東洋医事新報』二十六号、五九―六一頁、私立東京医学校編集部、明治四十二年七月
(48) 「私立医学専門学校指定規則」湯浅洗身『日本医事大鑑』一七四頁、日本医事大鑑刊行会、東京、昭和二年
(49) 「医師法案事件の顚末」入沢内科同窓会「入沢先生の演説と文章」五〇一～五七四頁克誠堂書店、東京、昭和七年
(50) 「試験委員と文部省」『医海時報』八二一号、三頁、明治四十三年三月十二日
(51) 「試験委員通牒問題」『医海時報』九二十号、二頁、明治四十三年三月五日
(52) 「試験委員長通牒の影響」『日本医事週報』七八〇号、明治四十三年二月二十六日
(53) 「東京日本両医学校の合併」『医海時報』八二六号、一九頁、明治四十三年四月十六日
(54) 磯部検三「私立日本医学校移転式に於て」『日本医学』七三号、三頁、日本医学社、明治四十三年十月
(55) 「東京医学校の合併」『日本医学』六七号、三二頁、日本医学社、明治四十三年四月
(56) 『日本医科大学十五年記念誌』二二頁、日本医科大学、昭和十五年
(57) 「山根氏」『日本医事週報』七八五号、一〇頁、明治四十三年四月二日
(58) 田中助一『萩の生んだ近代日本の医政家・山根正次』二〇～二二頁、西島愛三出版、山口、昭和四十二年
(59) 私立日本医学校幹事・校長代理・磯部検三「私立日本医学校移転式に於て」『日本医学』七三号、三頁、日本医学社、明治四十三年十月

(60) 唐沢信安「磯部検蔵論・日本医学校創立の謎」『日本医科大学同窓会報』二三六号、六頁、日本医科大学、平成二年一月一日

(61) 唐沢信安「塩田広重学長を偲んで（校史は何故書き変えられたか）」『日本医科大学同窓会報』二四六号、日本医科大学、平成三年六月二十五日

(62) 『日本医科大学十五年記念誌』六頁、日本医科大学、東京、昭和十五年

(63) 『日本医科大学七十周年記念誌』九頁、日本医科大学、東京、昭和四十八年

(64) 『日本医科大学八十周年記念誌』三十三～三十四頁、日本医科大学、東京、昭和五十八年

(65) 『こころの母校・済生学舎小史』七十四頁、日本医科大学同窓会、東京、昭和六十一年

(66) 川上元治郎主管『日本医事週報』「山根正次と川上元治郎との関係記事」三九八号、三九四号、三九五号、四六三号、四七四号、四七七号、四七八号、四八〇号、四八二号（明治三十五年九月～三十七年五月まで）

(67) 三好正之先生筆記「磯部検三調査報告書」日本医科大学同窓会宛（平成元年八月十五日）

(68) 山根正次「私歴」（自筆履歴書）山根寿代様蔵

(69) 田中助一先生（山口県萩市・医史学研究家。著書に『萩の生んだ近代医政家・山根正次』がある）

(70) 磯部検三葉書（はがき）、山根信子（赤川）様宛、明治四十一年十一月十三日（山根寿代様蔵）

(71) 「日本医科大学教授会誕生顚末記」『日本医事週報』七十九号、二八頁、日本医事週報社、昭和十一年六月二十八日

(72) 磯部検三「衆議院選挙落選報告書」（山口県議会事務局より平成元年、筆者宛）

(73) 「磯部検三日記」「日本医学校創立当時の状況」昭和九年六月二日（日本医科大学図書館蔵）

(74) 磯部検三「財団法人・日本医学専門学校申請書」明治四十五年二月八日（東京都公文書館蔵、文書類纂、630—B7—5）

(75) 「磯部日記」（昭和九年五月より九月まで）（日本医科大学図書館蔵）

(76) 「日本医科大学発達史編纂」『医海時報』二〇八五号、昭和九年八月十一日

(77) 磯部検三「今昔（こんじゃく）物語」『日本医科大学自治会会報』三十三号、昭和十四年十一月二十四日

(78) 『日本医科大学十五周年記念誌』一～三頁、六頁、日本医科大学、東京、昭和十五年

(79) 長沢豊「父を思う」『日本医科大学同窓会報』一五六号、日本医科大学、昭和五十一年十月二十八日
(80) 長沢米蔵「磯部検三追悼文」『日本医科大学雑誌』十六巻十二号、日本医科大学、昭和二十四年十二月
(81) 「長沢米蔵『随筆集・くろもん』(日本医科大学六十年の歩み)七八〜九十頁、長沢米蔵自費出版、東京、昭和四十一年

(東京都世田谷区)

Various Institutes and the Private Tokyo Medical School and Nihon Medical School, Following the Closing of Saiseigakusha

by Nobuyasu KARASAWA

The private Saiseigakusha medical school was suddenly ordered closed on August 30, 1903, under pressure from the Ministry of Education and the Tokyo University Akamon faction (Meiji Ikai). The more than 700 remaining medical students at Saiseigakusha were astonished and despondent to see the road to learning closed to them. However , Shigenori Sonoda, leader of the medical students, and four others sent out a manifesto to the more than 700 former Saiseigakusha students, calling them to assemble at the Hongo Central Hall. There they formed the Doso Igaku Koshukai ("Classmates' Medical Institute"), and resolved to continue their studies. Former Saiseigakusha lecturer Kiyotada Ishikawa and three others helped with this institute ("Tokyo Medical School"), and moved to 59 Sendagi-machi, Hongo. In April of 1910, the Tokyo Igakkou merged with the private Nippon Igakkou ("Japan Medical School"), to become the present Nippon Ika Daigaku ("Nippon Medical College").